



巻頭言

会長 牛田 三千子



強さと優しさ

昨年末は何十年ぶりといわれる大雪、今年は長雨による水害により日本各地で被害が続出し、便利さとはうらはらの都市生活の脆弱さを思い知らされる毎日です。

一方、最近の年少者に対する許しがたい犯罪の多発も、人間のこころの脆弱さが原因になっているのではないかと感じさせられます。なにか思い通りにならないことが起こるとすぐにカッとなってキレる、我慢ができない、攻撃的になるといふのは、精神の弱さからくるものに間違いありません。そして自分の言葉や行動が、相手の身体やこころにどんな大きな傷を残すかという想像力の欠如、さらに自分を愛してくれている人は誰もいないのだ、という荒涼とした感覚が犯罪への引き金を引いてしまうような気がします。昨今のような、「勝ち組」「負け組」などという二極化した殺伐とした社会ではなく、相手の目線でものを見ることのできる温かい社会になることを願わずにいられません。それは、私たちが行っているボランティアの精神の基本でもあります。

脆弱でない強さと、一見その反対のようにも見える優しさとは、実は表裏一体のものであると気づかされます。

むかし、ハードボイルド作家のレイモンド・チャンドラーが「男は強くなければ生きていけない。しかし優しくなければ生きている意味がない」と書いています。「男」を「人間」と置き換えてまさに名言です。



大阪府男女共同参画課より感謝状授与

神谷 徹 ストローコンサート

西村 博子



11月19日(土) アイルモレコタ7階の会場で開かれたコンサート、今年は晩秋のひと時をやさしい調べとともに題して神谷徹さんをお招きしました。すでにテレビで放映されたのを見られた方、以前からご存知の方は勿論、60名の方が何日も前から楽しみにして参加して下さいました。ストローコンサートは神谷さんの魔法のような手でいろんな形につくられたストローの笛から見事に奏でられました。「ストローからどんな音がでるのかな!」最初はとても不思議でした。スターダックス、里の秋の曲が流れます。「ウワー、綺麗な音!」曲がるストローを組み合わせて、唇にはさんで命がけで吹いてくださる、24年前からこのストローによる笛を吹き始められました。ストローをはさんだ口の上でその音が変わるという。ミスタードーナツのストロー、細いストロー、太いストローが組み合わせられるとバスの音が出た。ストローの組み合わせでいろんな音が出る。バスの音色を聴いて嬉しかった。なんか幸せな気持ち。いろいろな色のストローがいくつもいくつも組合わせていく。ソプラノ、アルト、2重奏、3重奏、4重奏の曲も演奏された。組み合わせで楽しい音が生まれる、まさしく発見の喜びの道を進まれてこられた。最高に楽しかったゲゲゲの鬼太郎、らせん状のストローの作品はなんと10年の歳月がかかったそうです。「楽しいな、こんなことをしていいのかな」その言葉からまたその楽しさが伝わってきました。

でんでん虫、はち、赤とんぼ、カエルのうた、ぞうさん、チューリップ、汽車などの童謡も次々とその形と共にきれいな音、面白い音が奏でられる。おとぎの国の世界にいるみたい。シャボン玉の曲ではストローから音色とシャボン玉が吹かれて飛んでいく。幾つの曲目を演奏して下さいたろう。50曲ぐらい。ストローを自由自在に組み合わせられ、その音を生み出される喜びをととても大切にされ、また楽しんでおられる神谷さんから、本当に楽しいひと時をいただきました。友人は愉快的なコンサートに久しぶりにお腹がよじれるほど笑ったと話していました。コンサートの後は花外楼さんの秋の特別な美味しいお食事をいただき、交流を深めました。心もお腹もゆったりとなり豊かなひと時でしたね。

神谷徹先生プロフィール

1973年京都大学理学部宇宙物理学科をご卒業、テレマン室内管弦楽団のリコーダー奏者であり大阪音楽大学で教鞭をとられています。24年前からストローによる独自の音楽の世界を作られ、国内のみならず、韓国、中国、イギリスなどの世界で演奏されています。

1998年に「暖かい心を育てる運動」第1回希望大賞受賞



“認知症の予防と介護”（青山昌彦先生）を聴いて

内藤 恵子



日本で認知症が、一般に広く知られるようになったのは、1972年に有吉佐和子の“恍惚の人”が、発表されてからです。それから28年たつて2000年に、介護保険制度が、発足されました。“家族介護から社会介護へ”が、キャッチフレーズで、6年が経ちました。

現在では、皆が避けて通れない問題になっています。青山先生のご講演は具体例をあげて、解り易く教えてくださいました。

認知症は脳の病気で、老化による物忘れとは、違うものである。例として、“朝食に何を食べました？”と問うと、老化では、おかずを思い出せない。ヒントをあげると、あっそうそうと思わせる。認知症では、記憶の仕組み（記名一保持一再生）の（記名一保持）ができないので、食べた事自体を忘れる。2、3分前の出来事が保持されず流れていく。過去の出来事は、脳に障害のない時に（記名一保持）されたので、再生できる。未来は想像できない。過去と現在の区別がないので、頭に浮かんだことが今となっている。この記憶障害を、理解より共感して、毎日の生活の中で今“できること”を数える。医師が診断する時は“できないこと”を、数えますが、家族は、できることに目を向けて行こう。子供と認知症の人の違いは、過去の人生があり、何十年生きてきたプライドがあることです。

人間の尊厳を認めて、命が終わるまで保ってあげましょう。

認知症にはアルツハイマー病と、脳血管性認知症があり、それぞれ生活習慣と相関、因果関係があり、生活習慣を改善すれば予防できます。

介護サービスには、施設サービスと在宅サービスがある。家族に認知症がでたら、一人で抱え込まないで、相談し、充実した介護サービスを受けられるように考える。

今はまだ、発展途上の介護サービスですが、年々サービスが改良、充実しています。お年寄りも喜んで、参加する人が増えています。

ZONTAのメンバーも、お年寄りに興味を持ち、優秀なお年寄りになれるよう生き生きとした生活を送りましょう。

生活習慣の目標

一. 食事

和食(大豆、魚を中心に)

二. 運動

毎日の歩行運動(万歩)

三. 精神

過度のストレスを避ける

いきいきとした生活を送る。

四. 脳の訓練

単純計算。音読。

手指の運動(ピアノ)





平成17年10月の例会は大阪府池田市での移動例会でした。自然素材にこだわったハウス・レストラン「ビアン・シュール」で、11月に行われるストロー・コンサートの打ち合わせなどをした後、市内散策にとびだしました。

まずは日清食品の記念館です。実は池田はインスタントラーメン発祥の地。1958年、安藤百福氏が自宅裏庭の小屋で研究を重ね、ありふれた道具を使って世界初のインスタント麺“チキンラーメン”を生み出しました。記念館にはこの研究小屋が再現されています。その他、発売当初からの即席麺の外袋やカップが年表にして展示してあったり、チキンラーメンの手作り体験もできるとあり、館内は親子連れで大変にぎわっていました。

次に逸翁美術館を訪ねました。この美術館は阪急電鉄の創始者である小林一三氏(雅号“逸翁”)の旧邸「雅俗山荘」に、氏が収集された書画、陶磁器、漆芸品など約5000点が収蔵されています。私たちが訪れたときは「雅美と超俗」と銘打って琳派と文人画派の数十点に及ぶ掛け軸、屏風、茶碗などが展示されていました。明治、大正、昭和を生き、



商工大臣、国務大臣をも歴任した実業家、小林一三氏は余暇に茶道や古美術鑑賞を楽しまれた文化人でもあったわけです。昭和28年の茶会を再現した茶室の室礼を見たときには、氏はこの取り合わせをどんなに楽しまれたことだろうと恐れ多くも私もこのお茶会に同席しているような気分になりました。楽長入、宗入や本阿弥光悦、尾形光琳、乾山の茶碗や向付、酒井抱一や俵屋宗達の掛け軸など超一級の美術品を間近に見、時空を超えて今もなお人々を魅了し続ける古典の素晴らしさに改めて畏敬の念を抱きました。

時雨空のしっとりした一日、とても楽しく心豊かにしてくれた移動例会でした。



逸翁美術館にて

女性の地位・国際委員会

「ベアテの贈りもの」を觀賞して

2005年7月、牛田さん、宮本さん、久岡さん、辻さん、中塚の5名で映画「ベアテの贈りもの」を見に行きました。

ベアテ、シロタ、ゴードンは日本国憲法に「男性平等」を提案された女性です。“日本国憲法の草稿に「女性の権利」を書くという。私の仕事は歴史の隠された部分として本来秘密のままふせておかれるべきものだったのかも知れませんが、しかし世界の人権、特に女性の人権の現状を見た時、そして日本のさまざまな集まりで、かつて私の身に起こった事柄を公にし、人々に語ったときから、私の心の奥深くにしまいこんだ記憶をたどり記録しておくことが必要であると感じました”というお気持ちの上に、「1945年のクリスマス」と言う書籍を出版されました。映画の画面からお見受けするベアテ氏はとても美しく、魅力ある女性でした。日本の方々の強い反対を受けられたり、あらゆる御

中塚 淳子



苦労の中に、平和の為に役立つものがが必要です。女性が幸福にならなければ、世界は平和にならないと言う強い信念のもとに女性の人権と男女平等の条文を日本国憲法に制定されるに至りました。以来、日本の女性の活動がいちじるしく活発化し、多くの立派な女性が続出したのは申し上げるまでもありません。興奮のまま映画館の近くのねぎ焼を皆でいただいて帰って来ました。有意義な一日を送る事が出来ました。





平成17年11月5日(土)～6日(日)

11月5日の金沢認証式終了後、日航金沢ホテル前を15:30バスで参加者一同の出発となった。140名程の認証式参加者の内65名のご参加と伺いましたので半数近いゾンシャン参加による一泊旅行となりました。

兼六公園に閉園少し前に到着し、ガイドさんの良いところ取りのポイント案内で晩秋の美しい風景と共に立派な松をはじめとする木立に「加賀百万石」の歴史と財力の深さを感じました。すでに冬支度が園内の木々に施され、この時期ならではの兼六公園でした。約一時間の乗車後、山代温泉「佳水郷」に到着。白山からの水を湛えた柴山瀧の淵にある、超近代な和風リゾートホテルでした。部屋も明るく清潔で広々としており、浴場も設備も文句無しで、到着早々、山代の湯をたのしませていただきました。7:00から大宴会場で浴衣に着替えたご一同が会し、エミー・ライ様や金沢ゾンタクラブ代表のご挨拶の後、北陸の幸を満喫させていただきました。美酒、美味の中でも特に今回の為に解禁間もない認証タッグ付の越前ガニがふんだんに振舞われ、甘味の深いお味は今も忘れられません。暫らくして、宴も佳境となった頃、舞台ではカラオケが繰り広げられ、それに合わせてダンスをするゾンシャンも続出し、何とも言いえない楽しい盛り上がりとなりました。酔いに連れ、絶えること無くカニを着に唄や踊りの宴をたのしませていただき、この間、金沢ゾンタの方々、会場を走り廻って皆様のお世話をなさっておられたのが印象的でした。後で、このような宴会はゾンタでは初めてのこととお伺いいたしました。朝までに、幾度も優しいお湯をお頂戴し、浮世の憂さを流させていただきました。良い一日でした。

翌日は金沢市内観光です。私は何度も金沢を訪れておりますが、敢えて今回参加させていただいた理由は、茶屋の町散策、珠姫の寺天徳院のカラクリ人形公演、旧尼寺「木立庵」のそば、近代美術館と九谷焼等、個人旅行では周りにくい観光がお目当てでした。期待以上の内容でした。茶屋の町散策では、午前の観光客の少ない時間に散策が出来、旧遊郭見学では今日ではお目にかかれぬ遊郭ならではの凝った建具、欄間の建築様式や美術的価値の高い調度品を拝見し、抹茶と銘菓を頂き、最近評判の高い季節の銘菓のお買い物をいたしました。天徳院では將軍家から嫁がれた前田家藩主夫人を讃えた「カラクリ人形公演」を拝見し、数々の人形の繊細な動きの妙に感心いたしました。門前の「木立庵」では、新そばの風味豊かな腰の強い美味なるそばとプリプリの大海老のてんぷらをお頂戴し、大満足でした。その後、近代美術館を經由し九谷焼の名店にて高品質で安価でご当地ならではの磁器を数点買い求め、家庭で使う度に楽しかった今回の旅を思い出しています。全て楽しく期待以上で参加者全員大満足の旅でした。

全ての行程で、細部に亘り金沢ゾンタの方々がお世話下さり、そのお心遣いの程は心より感謝いたしております。金沢駅でお別れの時、皆様方お疲れ著しいご様子でした。当クラブではとてもこのようなお世話は出来ないなあと感服いたしました。深謝。





10月28日(金曜日)から三日間の予定で大阪Ⅱゾントクラブの古の美女7人(牛田・川村・田中・辻・久岡・宮本・笠置)で、伊丹空港から一路、仙台空港へ向かいました。お世話を下さったのは、毎回お馴染の田中茂美さんです。今回初めての参加なので色々と不安がありましたが、ほとんど修学旅行気分です舞い上がっていました。お昼頃、仙台空港に到着し、ジャンボタクシーが迎えに来てくれました。私にとってジャンボタクシー運転手が女性でとても珍しいと思うと同時にゾントの会員がこんな事で驚いているのは、とんでもないと心の中で思いました。

東北自動車道を北に進み、平泉に向かいました。昼食は平泉名物のお蕎麦にその店の店主に義経にまつわる色々な話を聞いた後にいただきました。お腹が空いていたので打ちたてのお蕎麦のおいしさは格別でした。腹ごしらえが出来、幸せな気分の中尊寺、義経堂、金色堂、毛越寺等を見学致しました。



その後松島の松庵という宿に夕方入りました。東北旅行は以前に行った事があったので、あまり期待はしていませんでしたが、宿が松庵という事で、どうしても行きたいと思って参加致しました。想像以上に素晴らしい旅館で茂美さんに感謝、感謝です。風景もさる事ながら、お部屋、ロビー、ラウンジ、お風呂、露天風呂、書いていたら限りがない位、全てに行き届いていて唯々結構でございますという印象でした。その上お食事が奇麗で美味しい事、楽しい雰囲気の中で夕食を頂き満足、満足の世界でした。

10月29日(土曜日)2日目は午前中、嵯峨溪に行って、太平洋側から、船で松島を見物致しました。以前に来た時は芭蕉の俳句の意味が正反対に理解して、あまりにも何もなくなつて松島という言葉しか出なかったのだと、自分勝手に決め込んでいましたが、今回嵯峨溪から松島を見て、雄大で長い歴史の中での風景の素晴らしさを感じ、芭蕉が唯々感激して松島以外の言葉が出なかったというのが理解出来ました。本当に美しかったです。船に乗っている時間は40分位でした。その後松島を後にして刈田山頂、蔵

王に行きました。蔵王は山形県と宮城県の県境にあり、山形県側は豪雪でスキー場で有名な所ですが、宮城県側は冷たい強風で気候が随分と違うそうです。蔵王ではお釜が見えるかどうか大変心配していましたが(中々きれいに見える事が少ないそうです)エメラルドグリーン水面がもや一つなく、きれいに見え、皆全員、感激、感激でした。ななかまどという植物が沢山山頂近くに植えており、風が強いせいか、山の斜面に沿って倒れそうな程、地面すれすれに生えております。やはり植物も生きる術を身につけて頑張っているのかと思うととても健気でかわいく思いました。



昼食は風雅の国でお蕎麦を食べました。1日目のお蕎麦とは味が異なり、中々手打ち蕎麦が食べられないので蕎麦好きの私にとっては最高のごちそうでした。その後出羽三山(月山、羽黒山、湯殿山)神社、三神合祭殿を詣りました。壮大な神社で、三神をこの神社で合祀しており、三山を詣でた事になるそうです。自然が先年以上の年月を隔てて今にあり、歴史の長さや自然の偉大さをつくづくと感じ入りました。2日目の宿は上の山温泉の名月荘で、広大な敷地の中にゆったりした館物が点在しており、少しレトロな雰囲気がかもし出されています。夕食は50人位入れる大広間でゆったりと頂き、大きなガラス窓に一面の夜景は都会の夜景とは趣きが異なり、ともしっとりしてきれいでした。



あつという間の3日間でいよいよ今日で終わりです。朝9時に旅館を出発し、上の山温泉館で宮本先生とお別れ致しました。宮本先生は、山形新幹線で東京へ出発致しました。いよいよ最上川船下りです。待ち時間の間、それぞれ買物を楽しみ、その後おしん船という名の船で川下りをしました。夏の間使用する船で屋根がなく真中に少しだけ、わらぶき屋根になっており、昔は船頭さんがそこで寝泊まりして上り下りをしたそうです。下りは早いのですが、上りはその時の気候で40日位かかる事もあるそうです。船頭さん案内人の人が2人乗って川下りを案内して下さいました。とても説明が楽しく、秋田弁が新鮮でお腹を抱えて笑い転げました。その後、旬の話題の蝉しぐれのロケ現場を見学して山形空港から伊丹空港へ向かいました。皆様無事到着、めでたしめでたしで解散です。お世話になって有難うございました。楽しく嬉しく最高でした。



2006年春の移動例会・仁和寺

久岡 眞佐代



ここ2~3年、春と秋の例会は、自然や歴史文化を求めて郊外を散策するのが恒例となっている。今年の春は、4月15日(土)、御室桜(遅咲きで背が低い桜)や徒然草にある「仁和寺の法師」で有名な京都「仁和寺」(平安初期に建立)を訪れた。

その日、私は集合時間を間違えて1時間早く京都駅に着いた。思いがけず手に入れた自由な時間、京都駅前の喫茶店でコーヒーを飲みながらミステリー「報復」(ジリアン・ホフマン著)をゆっくり楽しんだ。「ゆとりある時間が幸福の第一歩」と何かで読んだことがあるが、まさしく至福の1時間であった。

午前11時30分、仁和寺山門前の「左近」にて例会を開催し、昼食後御室桜を鑑賞した。「左近」の京料理は、伝統の中に洋風感覚を取り入れ、また訪れたいと思うお味でした。

あいにく今年の春は例年より寒く、御室桜は5~7分咲き、しかも当日は急に冬に逆戻りしたような肌寒く小雨混じりの天気であった。しかし、その天気が幸いして見物客が少なく、広い境内をゆったりと散策することができた。

雨で洗い流された鮮やかな新緑を背景に淡いピンクの御室桜を中心に、しだれ桜やそめい桜、そして赤紫色の山つつじが随所に咲き乱れ、まるで1枚の風景画を観ているような気持ちになった。

私の青春時代に桜見物は封印されていた。目指していた国家試験の第1次試験が5月から始まるため、4月は受験勉強の追い込みだったからである。試験に合格したら思いっきり桜見物を楽しむのが私の一つの夢でした。そんな時代を懐かしく思い出しながら、今年は小雨降る中の落ち着いたお花見を楽しんだ。





新しくメンバーに加えていただいた坂本千代と申します。高知県出身で19年前に神戸にやってきました。現在は神戸大学国際文化学部教授で、おもにフランス文化・文学を専門としています。

私は学生時代からフランス19世紀の女性作家ジョルジュ・サンドとその作品にたいする興味を持ちつづけてきました。その一端は著書『愛と革命 ジョルジュ・サンド伝』『ジョルジュ・サンド』『ジョルジュ・サンドの世界』（これは共著）として発表しています。また、サンドを研究の中心として位置づけながらも、できるだけ広くフランス19世紀の文化を探りたいと思っているため、1997年にフランスのリヨン第2大学に提出した博士論文は、15世紀初めに活躍したジャンヌ・ダルクの生涯と伝説が、19世紀ロマン主義時代の文学作品や歴史書中でどのように解釈され描かれたかという主題を扱ったものでした。

ここ数年は、サンドの友人でのちにライヴァルとなったマリー・ダグー伯爵夫人（筆名ダニエル・ステルン）について研究してきました。彼女は音楽家フランツ・リストの恋人（彼との間に3人の子どもをもうけ、そのうちの一人がリヒャルト・ワーグナー夫人となるコジマ）としてある程度知られていますが、彼と別れたあとは作家・ジャーナリストとして活躍しました。1848年のフランス二月革命に関する彼女の大作『1848年革命史』は今でも広く読まれる重要な作品です。

ところで、私がゾンタクラブの存在を知ったのは1998年のことです。同僚からの紹介が縁となって、同年9月に大阪のゾンタクラブのチャリティイベント「講演とサロンコンサートを集い」で『ジョルジュ・サンド 女性の自立、シヨパンとの愛』という題目でお話させていただきました。りっぱな会場で、大学とは違う雰囲気の大勢の聴衆を前にしてとても緊張してしまったのを覚えています。

その後しばらくゾンタの方々との接触の機会がなかったのですが、ことしの夏のある日、宮本典子先生からお電話があり、宮本先生、牛田会長と3人でお食事することになりました。その時に今年6月に出した拙著『マリー・ダグー伯爵夫人の孤独と熱情』のことを話題にしたところ、おふたりが興味を持ってくださって、9月8日のクラブ例会の卓話をさせていただくことになりました。題目はやはり「マリー・ダグー伯爵夫人の孤独と熱情」とし、本の中には入れられなかった肖像画などをコピーした資料を作成して、ダグー夫人の生涯や作品について述べました。ゾンタクラブの皆様とのこの2度めの出会いをきっかけに、11月からメンバーとして参加させていただくことになりました。非力な私ですが、ゾンタの精神に沿った活動で女性の地位向上のために精一杯つくしたいと考えておりますので、どうぞよろしく願い申し上げます。



坂本千代会員の卓話

編集後記

はじめに会報発行が大幅に遅れましたこととお詫びします。手作り会報を作るべくPCソフト「パーソナル編集長」を購入したものの、手に負えずプロにお任せする結末となりました。次号はもっとスピーディに発刊しますのでよろしくお願い致します。

広報委員 久岡眞佐代